

(株)キャラクターコン  
サルタント モブキャ  
ラ部門業績報告書

モブキャラ担当タナベ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本業績報告書は、読者皆さまの日頃のご支援ご声援に対しまして、当社がより詳しい実態を取り上げるべきだろうと一念に従い、また、広くアクセス数を増加を目的に小説家になろう様だけでなく、こちらハーメルン様でも公開する運びとなりました。

途中、当社が関与しますキャラクターの方々に対して、読者の皆さまより、助言をしていただく場面が度々ございます。その時は、何卒、無理なき範囲で、お快く答えていただければと考えている次第でございます。それではクリック、アクセスの方をどうぞ

# 目次

第1話 茂武栄男さま

1



# 第1話 茂武栄男さま

おはようございます。

僕の名前は茂武栄男って言います。

よく変わった名前と言われますが、その通りだなあと自分でも思っています。

だけど、僕が通う学校にはもともと変わった名前の人が沢山います。

例えば、校門前で何やら言い合っている男女は僕のクラスメートですが、非常に変わった名前でした

国立神城島学園

それが、僕が通う学校です。

この神城島学園は、日本の領海に建設された人工島です。

その経緯や歴史はあんまり覚えていません

20世紀末、異能を持つ人やなんだか魔法使いがどうのこうのといった世界になり、各国でより実態的な社会現象も含めた学術機関が必要になって、このような人工島を「建設」。日本国もその流れに（初期の段階で）乗ったのだとか

建設当初は日本国からの出資によって立っていたそうですが、学生が増えるにつれ島

そのものの経済が発展。今までの出資金プラス $\alpha$ を政府へ返還し、国立とは名の付くものの学校法人によって差配されている島

そんな感じです

この神城島では少なくとも数十万単位の人が住んでいます。

というのも、神城島へ入島入学するには試験も入金も不要です

地元の市役所へ出願を申請すれば、神城島学園職員理事局の判断により1週間後には生徒として入島入学を果たせるというわけです

しかし、この判断も現在では有名無実化

ビッグデータがどうのといった理由で、前科や不良行為などがなければ申請は一発で通るようです

海外からの留学生も積極的に受け入れているのだとか

僕は神城島学園歴史学部在籍しております

学生の自主性を育むという理由でほぼ放任状態の教育カリキュラムですので、生活や行動の自由は大いにあります

この前なんかも自転車で神城島一周を果たしました

SNSで写真を途上途上であげましたが、反応が無かったのは何とも言えません、何はともあれ今日は論文を提出する日です！

今から印刷し

論文の提出をなんとかギリギリで提出することができました

先生からの困った視線が少々神経を縮めました、今は緩んでいます  
時は夕方17時。この頃になると町は学生であふれ出します

しかし、目に映るものは、醜いと理解しつつも男の嫉妬滾らせるものばかりです

うだつの上がない男子生徒の周りには、学園のマドンナともいえる美少女たちが

美人な生徒会長と話合っている身長の高い（180cm?）男子の後ろには、これまた

美少女たちが

その他、色んなカップルが!!!!!!

いや、もう、やめておきましょう

お世辞にも美男子と言える顔でもありませんし、何か特徴特技がある訳でもありません

何と言っても、このお腹。スポーツなんて、口に食べ物を運び、顎を上下運動して、喉を鍛えるぐらいしかしていませんから、当然でしょう

しかし、なんというか

この学園島は、本当に美男美女が多いなあと思います

先月来た転校生も非常に綺麗

寄り道はこの神城島に住む学生としては当然のことです。

だって、こんなにワゴン車があるんですから

クレープ、ドーナツ、コロツケ、ケバブ、焼きそば、たこ焼き、惣菜パン……

生来の出不精とデブが合わさったような人間なので、頭の中で1週間のワゴン献立が自動的に生成されていきます

ワゴンからはなじみとなった店員さんが「今日はどこで買うの？」と聞いてきます  
「悩ませてください」と場を濁します

財布と相談する為に、一旦広場へ行くと、制服から見るに別の学校でしょう。これまた、美男美女の組み合わせで揉めているそうです。

色恋は10代の特権だとは思いますが、なんというか食事の前でああも言い争われるのは勘弁願いたいものです。

睡眠、セックス、食事。人類であればこれらは集中してやるべきだというのが、僕の



人間論でございます。もつとも、内一つは未だ経験ならずですが…

まあ、関わり合うのも馬鹿げていますし、腹を空かせるために腹を立てるなんて精神的に良くないので、気持ちを切り替えていくべきでしょう

やはり、ここはケバブを一ついただ

夕陽が健気に輝く頃

今度はなじみのコンビニで買ったスイーツを鞆に忍ばせ、アイスカフェラテをちゅーちゅーと啜りながら帰っていると、橋の上でなんだか思いつめた青年少女がいまし

階段というものはきつくはないんですよ。ただ息切れがひどくなってしまうだけでふと見上げると屋上で女性が

手洗いなどを済ませて、寝間着に着替えるとソファにもたれかかります

これは習慣なのです。何人かの健康至上主義者はカウチポテトがどうのと言いますが、精神衛生こそ健康の第一歩だというプラシーボ効果を信じている僕であります。

さて、ソシヤゲをするか、夕寝をするか…

ジーーーーー!ジーーーーー!

耳につんざいたのは不親切なインターホンでした

どうしても出なければならぬのかとも思いましたが、もし配達であれば出なければなりません

居留守の再配達など、あまりにも馬鹿げているからです

「はい、茂武ですが…」

ドアを開けると、私と同じくらいの背丈のスーツ姿の男性がいました

「お忙しいところ、恐れ入ります。私、株式会社キヤラクターコンサルティング、モブキヤラ部門担当のタナベという者です」

「お茶です」

「ああああ、これはどうも」

こういったセールスは神城島でもありますが、ここまであからさまなものは初めて見ました

普段の僕ならこういったセールスは門前払いするのですが、この方はなぜか不思議と話だけでも聞いてみようと思ってしまったのです

「それで、キャラクターコンサルティングさん？　でしたか。一体、どのような会社で……」

「はい、私どもはこの世界において、当にキャラクターと呼べる方々をより魅力的にする事で良質なストーリーを、視聴者や読者の皆さまに提供する事を生業としております」

「……ほう」  
あえて疑問の声は出しませんでした

彼の言葉が真実であれ、嘘であれ、この神城島ではまず見ないタイプのセールスだったからです

「それは、つまり、その、僕も何らかのキャラクターだと？」

「はい、その通りでございます」

取り急ぎ、この方は新興宗教の何らかだと思っただ方が良いでしょう。神城島にもこういった宗教団体はよく駅前で見かけます。

「左様でございますか」

「?」

「いえ、なにも。ところで、モブオさまにおかれましては、ここ最近何か変わった事は無かったですでしょうか?」

「特には、何も」

冷淡な表情でそっけなく返しましたが、このセールスマンの笑顔は一向に崩れません  
「取り柄ですの?」

「?」

「いえ、なにも。さて、モブオさまには、まずご自身の状況を確認していただきましようか」

セールスマンは立ち上がるとペランダへと向かいました

「モブオさま、あれをご覧ください」

セールスマンが指さしたところは、ちょうどこのマンションからでも見える路地裏でした。

目を凝らしてみると……!

「お待ちください」

「いや、だつてあれ……」

路地裏では、何と言うかこう……同年代の男女が拳銃や刀を持って一人の女性を追い

込んでいました。

神城島では時々、異能持ちの方々による衝突があるのは事実ですが、ただ見ているだけではよくありません

携帯端末を取り出そうとしたら、セールスマンに腕を掴まれてしまったのです。

「まあまあ、最後まで見ないと」

「最後までつて、そんな悠長な」

改めて路地裏を見ると、追い込まれた女性が演技がましく腕を上げると竜巻が巻き起こり、ここにもまで薄く聞こえる程の笑い声をあげながらビルをびよんびよんと飛び越えていきました

「い、今のは…」

「イベントというやつです。ま、物語の導入か、途中で起こるエンカウントのようなものでしょう」

セールスマンはまた座り、茶を一つ啜りました

「どうでしょうか。信じていただけましたでしょうか？」

「……いや、まだだ」

「まだ、ですか」

このセールスマンの心を見抜く性質に脱帽するばかりであります

僕は心のどこかで先ほどの光景が現実である事を

自分が、いやこの世界になにかが隠されていることを感じているのです

「次は何が起こるんですか？」

「なるほど」

セールスマンは自然な笑みを浮かべ、胸ポケットから手帳を取り出しました

「17：40。廃工場で爆発事故」

「え？」

次の瞬間、爆音が聞こえました

窓の外、距離は遠いですが火柱が上がっているのが見えます

「17：42。島周回モノレールで車両が1両だけ分断」

この島をぐるりと囲むモノレールが後部車両を取り残していました

「17：51。大通りでパニックが」

「わ、分かりました！ 分かりましたから！」

セールスマンは手帳をパタンと閉じました

「ご理解いただけましたでしょうか」

「…せざるを得ませんよ」

「ありがとうございます」

「それで、あなたは僕に何を伝えたいんですか？」

「契約でございます」

セールスマンはかばんの中から書類をいくつか取り出しました

「僕は未成年ですよ」

「茂武様、年齢などは関係無いのです。あなたが踏み入れる世界はもう様々な世代の方が活躍されている世界なので」

契約書はよく読めとは社会科の授業で習いました

しかし、いざ手に取って見ると

「名前欄と印鑑のとこしかないのですが」

「はい、本契約はそれほどまでに当社が無責任にならないのです」

確実に儲かる！今しかない！と言われるよりかは正直な契約だとは伝わりましたが、それにしてもバカ正直な内容に面を食らいました

「言いたい事は分かりますよ。今の爆破やらモノレールやら見て、そういう世界なんだなどは実感しましたから。肌一枚ぐらいいは」

「恐縮でございます」

「悩ませてください」

「当然のことかと」

本当のことを言うなら、後先考えずにハンコを一つポンと押したい気持ちではあるのです。

命がどうこうというのも肌一枚程度の実感で分かる訳がありません

ただ純粋に、このセールスマンをどこかまだ怪しさを以って見ているからなのです。

利益も損失も確実に存在すると分かると、後は契約者の素性や胡散臭さという話になるのかもしれませんが。

ですが、一つそれらを吹き飛ばす程に魅力的なものがあるとすれば、10代の健全な少年少女なら夢見る人多い、お話の世界に飛び込めるといふ事です。

僕だって、その一人です。

その世界へ1歩踏みだせるものが目の前に、それも署名ハンコでできるとなると安上がりではないかとも考えてしまいます。

本棚にあるいくつかのライトノベル・漫画を思い起こすと、なるほどこの島、いやこの世界で隠されている何かは今にも飛びつきたくなる世界です。

モブキャラじゃない、今から世界に、物語の人物になれるんだ。もしかしたら、あの不必要なまでのイケメンと美少女のクラスメートは主人公のようなキャラならば？

絶対に入って行ってやりたい。奴らだけに、楽しい思いも厳しい思いも独占するなんてずらい。



僕だって、僕だって、中途半端な歴史の浅い知識しかない僕だって、暇があれば食べ物に手を出すデブの僕だって

あの世界に憧れているんだ

気がつけば、署名&印鑑を押ししておりました

悔いが無い事と、低質なドツキリでない事を祈ります。

「当社は、そのような下卑た事は致しませんので悪しからず」

「心読めるんですか？」

「そういった能力は持ち合わせておりません。あくまで、少し分かる程度ですが」

「羨ましい」

「茂武様、いずれその羨ましきは私が持つことになるでしょう」

意味深な言葉にえ？と聞き返す程、察しは悪くありません

セールスマンは

「ああ、それと申し訳ございませんが、そのセールスマンというのはやめていただけませんかでしょうか。当職は、コンサルタント、でございますので。それにタナベで構いませんよ」

失礼

タナベさんは、契約書を丸め、僕に『刺しました』

「え、ちよ、これ」

「痛くないですよー」

言葉通り、痛くはありませんでした

しかし、心臓に、体内に何かが入ってくるという感触は何とも、こう

不快でした

「よし、入った」

「……………」

はつきり言つて、この契約の方が爆破予告やモノレールの停止よりも、よっぽど物語を感じました

「申し訳ございません。当社のマニュアルですので」

「…………いや、まあ、それは良いとして」

手をワキワキと開閉させたり、軽くジャンプしたりした訳ですが、特に体に何らかの変化は感じませんでした

「何か、違和感でも？」

「こう、なんか能力ーみたいなの使えるのかなって」

「ああ、左様ですか。使えませんよ」

バツサリと断言され、面を食らってしまいました。そうだこれは契約なんだと思ひ納得できました

「私も茂武様も神様ではありません。あなたは、あなたの力と閃きで、挑むべき世界観に従った能力を、ご自身で身に着けるべきなのです」

「だけど、丸腰の一般人が大したコネもなしに、あんな珍妙奇天烈摩訶不思議異能世界に挑もうってのはちよつと無理が……」

「ご安心を、私は能力を授ける事はできませんが、助言ぐらいなら可能です。もつとも、頻繁にはできませんが」

「……いや、納得してますよ。貰い物より、ちゃんと汗水流して手に入れた方が、愛着も湧きやすいでしょう」

「ご理解の速さに、感謝いたします。次に、報酬の話なのですが」

「報酬？」

「そうだこれは契約なんだと思いました。」

「僕がキャラクターとして活動するだけ、というのは些か対等なものではありません」

「実は、もう既に、この時より、茂武様のこれからの活躍に期待される方が、わずか存在しております」

「？」

「言葉が飛んでしまいましたね。既に茂武様を知名度無きながらも、キャラクターとして見ている方がいらつしやるといふ事です」

「さつきも、視聴者様だとか読者だとか言つてたけど、誰かに見られてるの?」

「はい。ですが、ご安心ください。それらのお客様は決して茂武様に手出しする事ができません。それはこの私、並びに当社が責任を以つて保証いたします」

「疑いながらも信じた方が良い、つて事にしておきます」

「ありがとうございます。そして、その報酬についてですが、1回の視聴につき、茂武様には手取り5000円の振り込みが為されます」

学生の時分には中々魅力ある給与でした

出来高歩合とはいえ5000円の額に釣られてしまいます

「そして、もし茂武様がキャラクターとしての格をお上げになられた場合、昇給をさせていただきます」

「はあ」

「現在の茂武様は、当に背景程度のモブキャラクターです。そうですね、当面はこのモブキャラクターからサブキャラクターになる事を大きな目標といたしましょう」

「小さな目標は?」

「背景に描かれるモブキャラクターから、敵に狙われるようなモブキャラクターがよろ

しいかと」

タナベさんをどうにも信用してしまうのは、僕の甘さでもあり、この衣着せぬ物言いでしょう

「それで、何をすれば良いですか？」

「それは茂武様がお考えになるべき事です。しかし、そう難しい事ではないと思いますよ」

「と、言われても…」

「一つ、助言をいたしましょう。非日常の世界へ至るには、非日常こそが最短の近道でございます」

「プライドと羞恥の問題かぁ」

すると、6時を示す鐘の音が鳴りました

神城島の時刻システムは島独自の衛星とほぼ同期しているとの事です

何故か、タナベさんは落ち行く夕陽を見て薄ら笑いを浮かべていました

「そうですね。最終的な部分はそういつたところに落ち着きますが…例えばシステムから知識の面から入れば、もうちよつと面白くなるかもしれませんよ」

タナベさんの含みのある言葉から、僕はこの時刻システムすら何かのイベントなのだろうと確信しました

「さて、茂武様。ここで少々お時間をいただきましたか？」

「まだ何かあるのですか？」

「これで最後でございます。と、言いますが、先程言いました視聴者様や読者の方々に、一つお伺いを立てていただきたく」

「お伺い？」

「つまり、視聴者様方のご意見を募る、という事です」

「視聴者や読者は僕に手が出せないんじゃない？」

「それは物理的な問題でございます。こういった概念的な行為に関しては私の許可と判断によって可能となります。無論、頻繁にはしませんよ。あくまで、私の許可」

「そうですね…それで、何について伺えばよろしいのでしょうか」

「茂武様が、キャラクターになるにあたって…主人公格となっているキャラクターと対峙するか否かです」

「それは、つまり…敵になるか味方になるかって事？」

「多少の語弊を含めるとしても、おおよそはそう捉えていただいて構いません」

非常に重要な選択肢です。敵か味方か。物語の上で大前提となる2つの立場です

「ま、先ずは聞くだけ聞いてみましょう」

「だけど、どうやって…物理的に、その、視聴者や読者様に接触ができないなら」

「そこが私の仕事でございます」

タナベさんは携帯端末を取り出すと少し捜査して、僕の前に出しました

「さ、どうぞで」

「どうぞで」

「ほら、大きな声で」

「……………」

心の準備というものはさせてはくれないようです

で、あるならば、ノってやろうというのが僕のやり方です

「えー、初めまして。僕は茂武って言います。茂武栄男です。その、今回キャラクターとして活動するにあたって、主人公？と対立するか否かを皆さんに聞きたくて……聞きたいです」

「はい、ありがとうございます」

文面に悩むところはありましたが、特に問題は無かったようです

「はい！これでよし！ 結果は1週間後にお伝えします」

「緊張するなあ」

「ま、そう票が集まるとは思わないでくださいね。まだ茂武様は、モブキャラクターです  
ので」

「はい」

「うん。さて！ それでは契約後の調整は終了となります。本日、もうこちらがご提示する用件はほぼ済んでおりますが、何か質問などは…?」

「……………いえ、ありませんね。完全に無いと言えば嘘ですが、そこは僕が説明すべき領域でしょう」

「左様でございますか。それでは、このあたりで失礼させていただきます。また1週間後、結果報告と報酬がちゃんと振り込まれていたかの確認に赴きますので」

「はい、ありがとうございます」

「ああ、そうだ。それと、この1週間で、色々と調べておいてください。その方が少しなりと楽になるでしょうから」

「色々と、ですね」

玄関まで見送ると、タナベさんは振り返って、最後、こう言いました

「茂武様、私、一介ながらコンサルタントとして、最後の最後では決して後悔させぬストリーをあなたに提供する覚悟でございます。それでは、また」

タナベさんの表情はその時だけ、営業スマイルはなく、哲学者めいた威厳と、宗教者の様な敬虔さを感じました。



部屋に、ポツンと一人

窓から見えるこの島は一体どこまでが本当の姿なのでしよう。

高揚が止まりません。キャラクターとして生活する事、きつとハラハラするようなストリーがあるのだろうという事、この島を調べてやろうという好奇心

僕はどんなキャラクターになるのだろう。頭の中で今まで読んできた漫画アニメ、ライトノベルのキャラクターを思い浮かべてしまいます。

いや、今は冷静にならねば

そう思った僕はまずご飯を食べる事にしました。コンビニ弁当2パック程